



はじめに

番外編までたどり着いていただき、誠にありがとうございます。

番外編では最初に新作腕輪の実験台とされた陸上部キャプテン山田俊樹を主人公としてストーリーが展開されていきます。

「従う理由」で登場したシーンは極力軽めの回想にとどめています。山田俊樹の物語をお楽しみください。

「従う理由」あらすじ

20xx 年。大学教授が人間を自由にコントロールできる腕輪を使い、学生たちを次々と言いなりの奴隷にしていた。

最初は陸上部部長の山田、同じ研究室でレスリング部の亮、そして亮の親友でレスリング部の琢磨、、、。

奉仕、開発、アナニー、露出、亀頭責め、潮吹き、あへ顔、お仕置き、撮影、玉責め、軽メッシー、変態オナ、便器化、緊縛、後輩や彼女の前での晒し、強制エロレス、種壺化、スカトロ、NTR、フィスト、、、3人は羞恥と屈辱の中でおとされていった、、、。

主な登場人物

田代（大学教授）：人間をコントロールできる腕輪を開発。真正のサディスト。熊のようながっちりとした体型。「身体心理学研究室」教授。

斉藤琢磨（主人公）：3 年。レスリング部部員。友達思いの情に熱い男。175 cm 筋肉質であっさりとした顔立ち。亮を脅しに使われ自ら腕輪を装着し、奴隷堕ちした。奴隷名シロ。

木村亮（琢磨の親友）：「身体心理学研究室」の学生。レスリング部部員。無邪気な性格。180 cm 筋肉質で男らしい顔立ち。奴隷名クロ。

山田俊樹（亮と同じ研究室の先輩）：4 年。「身体心理学研究室」所属。陸上部キャプテン。寡黙だが人から自然と好かれるタイプ。新作腕輪の最初の実験体。奴隷名ポチ。

初物

「はあ、、はあ、、はあ、、はあ、、、。よーしラスト一本！」
「うーっす！」

グラウンドは陸上部員たちの声で活気に満ちている。ハードなトレーニングを終えた部員たちは汗まみれで、白色のランパンランシャツは肌に張り付き、少し透けてしまっている。

「うわ、ただだよ、この練習着まじで、どうにかならないんすかねえキャプテン！ スケスケですよ、キャプテンのインナーもまるわかりw」
「仕様がないだろう、監督がチームの一体感を出すためにつて用意したものなんだから。男だけなんだから気にすんなよ。それより早く片付けしろ。」
「うーっす。」

後輩をなだめながら、片づけを指示する俊樹。片づけが終了し、部室の戸締りを終えると、俊樹は研究室に急いだ。

自分が所属する「身体心理学研究室」の教授から「練習後、急ぎで頼みたいことがあるから、練習着のままでいいから来てくれ。」と呼ばれたからだ。

汗でびっしりの白色のランパンランシャツは透けており、ランパンのインナー部分や、俊樹の引き締まった上半身、乳首までもがうっすらと見えている、、、。それでも急ぎだということで、そのまま向かうことにした。

教授は何かとうるさくパワハラ気質なところがあるが、俊樹も口数は少ないものの、頑固で信念を絶対に曲げないため、俊樹を言いように使うのはすっかりあきらめているようだった。

そんな自分に教授が珍しく頭を下げてきたので、今回は協力することにした。

「教授、、頼みたいことってなんですか？」
「密かに研究していた器具の新作がついに完成してね。それを試したかった

んだ。」

「器具？それで何するんですか？」

「人間の肉体的精神的苦痛をいやすための腕輪だよ。」

「え、、、本当にそんな効果があるとしたらすごい発明じゃないですか。でもそれって身体生理学の研究と関係あるんですか？」

「まあいいから、これを付けてみてくれ。練習後でちょうど疲れているだろ。」

疲れが取れるのであれば、部員の役にも立つかもしれない、、、そう考え俊樹は腕輪を受け取り、それを自ら腕にはめる。「カチッ」という音ともに、腕輪が俊樹の腕にフィットする。

「う〜ん、特に効果は感じませんね。」

「そうか？試してみるか、、、。山田、両腕をあげろ。」

ーーーー！？

俊樹は教授の命令通り両腕を上げてしまう。

「な、、、なんで、、、体が勝手に、、、。」

「おお、いいねえ、大成功だ、、、。」

「大成功って、、、いったいこの腕輪なんなんですか、、、？」

「言ったら、人間の肉体的精神的苦痛をいやすための腕輪だと。」

教授の表情は一変し、冷たい目で俊樹を見ている。俊樹に近づくと、汗にまみれた体に抱き着き、両腕を上げ、がら空きの脇を舐めていく。

ぺろぺろぺろ、、、ちゅば、、、ちゅば、、、ぺろぺろ、、、ちゅば、、、。

「な、、なにしやがる、、、やめろ！変態かよ！」

「嫌なら逃げればいい。そんなポーズとって両脇さらしておいて、本当は舐められたいんだろ。ほら、上を脱いで上裸になれよ。」

上裸になった俊樹のうぶな乳首を舐めていく教授。

「やめろ、、変態野郎、、、俺に触るな、、、！」

「そんなにらみつけてないで、いやなら逃げればいいだろ。変態はどっちだ、、、。さあそれじゃあいやらしく腰をふりながら、その邪魔なランパンも脱げよ。」

俊樹はストリッパーのように腰をふり、その汗だくのランパンを脱ぎ、自らの陰茎とプリケツをさらしていく。教授はこれまで見たくとも見られなかった俊樹の秘部をまじまじと見つめている。

「く、、、こんなことさせて、、何が目的だ、、、。」

「目的、、、？、、、私はただお前を披露や苦悩から解放してやりたいだけさ。さあ、自分で乳首をいじれよ。女の子にいじられていると想像しながらね。」

「くう、、うう、、、ちくしょう、、、。」

俊樹は蟹股で腰をつきだしながら、両乳首を自ら責めていく。その様子を教授は観察してただにやけている、、、。少したつと女子とのセックスを想像した俊樹の陰茎はムクムクと起き上がり、教授の方を向き始める。

ーーービクンビクンビクンッ！

「く、、、、。」

「研究室で乳首いじって、勃起さらすとは山田は大分変態だな。こんなんでも陸上部キャプテンやっついていいのかねえ、、、。」

「お、、お前が、、俺に、、、。」

「礼儀を知らないやつだ。私に見られて、そんなビクつかせて嬉しいんだろ。だったら感謝しないと。こんぐらいで終わると思うか？ほら、次はオナニーして見せろよ。普段まじめぶってるお前のオナニー見てやるよ。」

「や、、やめろ、、、、。」

俊樹の体は動き出し、オナニーを始める、、、。

「ぐう、、、やめろ、、、変態野郎、、、。」

「変態はどっちだよ、、こんなに勃起させて、しかもほら、先走りが出てきているよ、、、いやらしいやつだ、、、射精しそうになったら止めろ、、、落ち着いたら、再度しこれ。」

数十分延々と寸止めさせられている俊樹は、恥ずかしくて、悔しくて、精神的に追い込まれてく。

「いい感じの表情になってきたね、、ご褒美だ、、ほら、アナルを自ら広げて、私にバイブを入れられる体勢になれ。」

「嫌だ、、やめろ、、いい加減にしろ、、、いやだ、、いや、、、。」

俊樹は陸上で鍛えられた弾力性のある尻を教授に向けると両手でその尻肉をかき分け、教授がまだ見たことのないアナルを自らさらしてしまう、、、。

「うわ、、ピンク色だ、、毛もほとんどはえてないし、、艶々だ、、こんなエロイアナルは久しぶりだな、、、。」

教授は興奮しながら、俊樹のノンケアナルに小さめの遠隔式バイブを挿入する。そしてバイブのリモコンを握るとそのスイッチを入れる。

「ぐう、あ、、あ、、あやめろ、あ、あ、、、、、。」

「やめるわけないだろ、、お前がケツマンコで感じる従順な奴隷になるまでやめないよ、、、。ほら自分のペニスしこしこ猿みたいにしこれよ。」

「誰が、、、お前の奴隷なんかに、、！」

「ふふ、、、どうだか、、、。」

鼻で笑うと教授はそのままどこかに行ってしまう、、、。